

共生をめぐる意識と「生活の質」志向

三重野 卓

I 問題意識

共生という言葉は、もともとは、生物学の用語 (symbiosis) である¹⁾。そこでは、利益の観点から、片利共生、相利共生、相乗共生という現象が指摘されている。わが国において、共生という概念 (coexistence) が社会現象において注目を集め²⁾、共生社会のあり方について議論さるようになったのは、1980年代の半ばからである。工業社会が成熟化し、脱工業化が進み、よりソフトな関係性が注目されたからである。また、当該社会のシステムとしての開放性が高まり、その中で様々な異質性、多様性を許容するようになったといえる。1990年代、共生に関する議論はひとつのブームとなったが、そこでは、男女の共生、障害者との共生、高齢者との共生、外国人との共生といったように、スローガンとして、言及されることが多かった。また、共生の定義も、様々であり、実際には、合意が得られていない。ただ、こうした議論をまとめると、(1) 差異とか異質性への認識を踏まえて、共に在る、存在するという点が重要になり、また、(2) そうした人々が、葛藤し、協働しながら、関係性を持つということを意味する。さらに、(3) 利益のみならず、共感の視点が必要になる。そして、(4) 共生社会では、それらの人々の交流が盛んになり、ひとつの社会的統合をもたらすということが期待される³⁾。

共生、および共生社会への着目は、日本に特有の現象であるといえるが、諸外国においても、それに近い用語がある⁴⁾。例えば、社会的排除 (so-

cial exclusion) では、貧困のみならず、様々な側面で当該社会の成員が社会から疎外されるプロセスに着目し、それを回避することにより、社会に組み入れるという視点が重視される。社会的包摂 (social inclusion) でも、教育、労働などを通して、人々が当該社会に包摂されるという方向に特色がある。また、とりわけ、人々の帰属意識に注目する社会的凝集性 (social cohesion) という用語もある。さらに、近年、社会関係資本 (social capital) という概念も注目されており、そこでは、ネットワーク、そして、信頼、規範 (互酬性) に焦点がある。共生について考える場合、これらの論理は参考になろう。

近年、こうした関係性とか連帯、交流、および社会的統合が注目されるのには、それなりの理由がある。新自由主義、効率化の流れの中で、人びとの関係性が崩壊しているのではないかという危惧も、その理由のひとつである。実際には、共生原理と競争原理はトレード・オフではなく、補完関係にあるべきである。もちろん、現在の社会を特色づけるタームとして、グローバル化があり、国家間の共生という視点もあるが、同時に人々が生きる「地域」への着目も不可欠になろう。そして、そこにおける意識の把握が課題になる。

一方、「生活の質」⁵⁾とは、社会科学の分野では、70年代から注目されるようになった概念であり、それは、物質的志向から脱物質志向へという動向とも係わっている。国民所得の水準が高まり、耐久消費財が普及した状況において、「ものからこころ、関係性」という方向が注目された。「こ

ろ」とか「精神」という場合、その前提には関係性があり、それは、連帯、共生へ繋がる。この意味から、共生と「生活の質」の概念は関係しあっている。「生活の質」は、客観的な社会指標によって測定されるが、同時に、満足度などの主観的な指標によっても表わされる。しかし、共生の意識、行動についての体系的な数量化、測定の作業は、十分に行われているとはいえない。

内閣府に設置された「共生社会形成促進のための政策研究会」⁶⁾は、共生社会の指標体系を作成している(筆者は、委員として参加)。そこでは、既存の統計調査の結果を利用しているが、さらに「共生社会に関する基礎調査」を実施している⁷⁾。同調査は、2004年3月に実施され、サンプル数5000、有効回収数3470(回収率69.4%)である(調査方法は、層化2段無作為抽出法、面接調査)。ここでは、そのデータを使用して、分析を行うことにする。

本稿では、まず、共生のための前提について検討しながら、基本的統計量により、共生社会のあり方を描写する。次に、多変量解析による分析を行う。具体的には、(Ⅰ)共分散構造分析により、共生社会の見取り図を描き、さらに、(Ⅱ)「生活の質」をめぐる三つの変数を被説明変数として、多項ロジスティック回帰分析を行う。そして、(Ⅲ)そのうちのひとつの「愛着感」に着目し、林知己夫の数量化理論、第Ⅲ類により「愛着を感じる理由」の実際について検討することにより、「愛着感」をめぐる見取り図を描くことにしたい。

Ⅱ 共生、「生活の質」の前提と現状

ここで使用する変数について検討を加えることにしたい。

①まず、「生活の質」については、主観的な指標により測定する場合も多く、生活満足度がたびたび使用されている。もちろん、生活満足度は、領域別にブレーク・ダウンして、例えば、労働、健康、所得等の満足感を把握することもある。

しかし、ここでは、一般的な生活満足度を取りあげる。満足度については、人々の現状と欲求水準の乖離により、満足—不満が顕在化するといわれている。その場合、客観的な水準があがると、欲求水準もあがり、その乖離により不満が顕在化することもある。また、高齢者は、一般的には満足し易いという結果もある。こうした限界を認識しつつ、ここでは、まず、「満足感」を採用する(以下、括弧内は、変数名)。

②ここでは⁸⁾、地域共生について検討するのが、ひとつの目的となっている。そのためには、人々が地域に対して愛着を持っているか、把握する必要がある。これは、共生の議論の中で主張されている帰属意識と関わり、その「質」を測定するものであるといえる。ここでは、こうした「愛着感」を設定する。

③「生活の質」とは主観的なものであるとともに、人間関係的なものでもある。地域や社会のために「役立ちたい」という意識は、共生のための貢献意識を表している。

以上の意味から、「生活の質」、共生をめぐる意識として、「満足感」、および、「愛着感」、「役立ちたい」という帰属意識、および貢献意識に関する項目を採用することにしたい。

④共生とは、人間関係的なものであるとしたら、他者へ「関心を向ける」、他者から「関心を向けられる」という点は、基本的な分析対象になる。

⑤共生は、その内部にソーシャル・キャピタル(社会関係資本)という観点を含んでいるとしたら、ネットワーク、信頼、規範(互酬性)の要素が重要になる⁹⁾。ここでは、人と接するとき、信頼しながら接するという「信頼感」を採用することにする。また、たいていの人は、他人の力になりたいと考えていると思うかという「他人の力」、および、人々は助け合っていると感じているかという「助け合い」という関係的側面も不可欠になろう。これは、支え、支えられるという関係、多様な関係性に繋がる。

表1 意識項目の一覧

<p>満足感「あなたは、現在のご自身の生活について、満足していますか。」非常に満足している (17.3%)、どちらかといえば満足している (48.7%)、どちらともいえない (20.2%)、どちらかといえば不満である (11.9%)、非常に不満である (2.2%)、平均 (3.670)、標準偏差 (0.968)</p> <p>愛着感「あなたは、自分の住む地域について、生活する場所として愛着を感じますか。」とても感じる (27.7%)、まあまあ感じる (50.3%)、どちらともいえない (13.5%)、あまり感じない (7.5%)、まったく感じない (1.1%)、平均 (3.960)、標準偏差 (0.898)</p> <p>役立ちたい「あなたは社会や地域の人のために役立ちたいと思いますか。」とてもそう思う (17.4%)、まあまあそう思う (50.7%)、どちらともいえない (19.5%)、あまりそう思わない (8.3%)、まったくそう思わない (2.5%)、わからない (1.6%)、平均 (3.735)、標準偏差 (0.932)</p> <p>関心を向ける「あなたは、近所の人々に対してどれくらいの関心を向けていますか。」とても関心を向けている (7.4%)、まあまあ関心を向けている (44.6%)、どちらともいえない (22.8%)、あまり関心を向けていない (19.3%)、まったく関心を向けていない (4.8%)、わからない (1.1%)、平均 (3.310)、標準偏差 (1.022)</p> <p>関心を向けられる「あなたは、自分と同じ地域に住んでいる人々から、どの程度関心を向けられていると感じますか。」とても関心を向けられている (3.9%)、まあまあ関心を向けられている (27.5%)、どちらともいえない (34.9%)、あまり関心を向けられていない (18.1%)、まったく関心を向けられていない (5.4%)、わからない (10.2%)、平均 (3.097)、標準偏差 (0.957)</p> <p>信頼感「あなたの考えは、この2つの考えのうち、どちらに近いと思いますか。」</p> <p>A)「人と接するときは、その人を信頼しながら接するほうである。」</p> <p>B)「人に接するときは、注意深く接するほうである。」</p> <p>Aに近い (34.2%)、どちらかといえばAに近い (25.4%)、どちらともいえない (13.1%)、どちらかといえばBに近い (14.2%)、Bに近い (11.6%)、わからない (1.5%)、平均 (3.572)、標準偏差 (1.391)</p> <p>他人の力「あなたは、あなたの地域の人について、この2つのどちらに近い考えを持っていると思いますか。」</p> <p>A)「たいいていの方は、他人の力になりたいと考えていると思う。」</p> <p>B)「たいいていの方は、自分のことだけ考えて行動していると思う。」</p> <p>Aに近い (16.7%)、どちらかといえばAに近い (18.6%)、どちらともいえない (22.6%)、どちらかといえばBに近い (21.1%)、Bに近い (17.3%)、わからない (3.7%)、平均 (2.959)、標準偏差 (1.350)</p> <p>助け合い「あなたの地域では、人々は助け合っていると感じますか。」いつも助け合っていると感じる (12.7%)、まあまあ助け合っていると感じる (49.9%)、どちらともいえない (23.1%)、あまり助け合っていないと感じる (8.9%)、まったく助け合っていないと感じる (1.7%)、わからない (3.8%)、平均 (3.655)、標準偏差 (0.882)</p> <p>差別認識「あなたは、周囲の人たちが差別的な振る舞いをしているのを、どの程度見聞きしていますか。」よくある (1.6%)、時々ある (10.4%)、どちらともいえない (8.7%)、あまりない (39.1%)、まったくない (32.1%)、わからない (8.1%)、平均 (2.023)、標準偏差 (1.025)</p> <p>差別同調「周囲の人たちが差別的な振る舞いをしている時に、自分も同調して差別的な発言をしてしまうと思いますか。」そう思う (0.5%)、どちらかといえばそう思う (2.7%)、どちらともいえない (13.5%)、どちらかといえばそう思わない (18.3%)、そう思わない (59.5%)、わからない (5.5%)、平均 (1.588)、標準偏差 (0.877)</p>

⑥共生では、差異を差異として認める、そして、人々が社会から排除されない、という点が不可欠になる。ここでは、周囲の人たちが差別的な振る舞いをどの程度しているか、という「差別認識」、および、自分も同調して差別的な発言をしてしまうという「差別同調」という変数を採用することにした。

具体的な質問文、および、回答のカテゴリーは、表1の通りである。そこでは、各意識項目の度数分布、および、基本統計量が示されている。

ここで、尺度の平均値（質問項目にポジティブに反応した場合、5、ネガティブに反応した場合、1、という5段階尺度とする）、および標準偏差についてみると、「愛着感」、「役立ちたい」、および「満足感」といった帰属意識・貢献意識、「生活の質」関係の項目の平均値が高く、標準偏差が低く、ちらばりが相対的に小さいという結果になっている。度数分布では、当然、ポジティブに反応する方に、集まっている。「関心を向けられる」、「他人の力」の平均値は、それらに比較して低い。そして、「差別認識」、「差別同調」の平均値は非常に低く、差別を認識するとか、それに同調して行動することは、少ないという結果になっている。なお、「信頼感」、「他人の力」の標準偏差は大きく、個人差が大きいことが分かる。

Ⅲ 共生社会の見取り図

それでは、共生をめぐるメカニズムは如何なるものであろうか。ここで、以上の観察された変数とともに、観察されない潜在的な変数を仮定し、共分散構造分析の一種である多重指標分析を適用してみよう¹⁰⁾。共分散構造分析は、因子分析と重回帰分析をあわせた手法として位置づけられる。

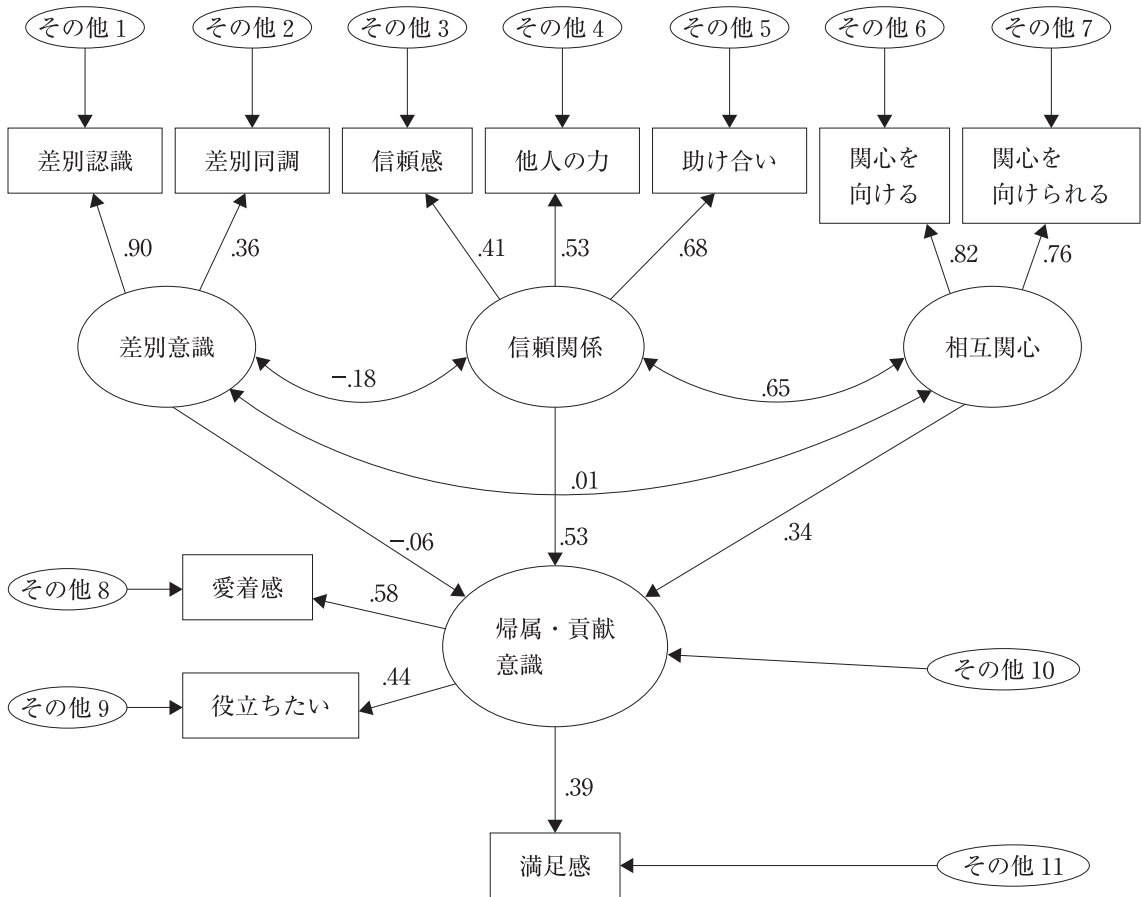
ここで、最終的な「生活の質」に関する変数として「満足感」を採用することにする。さらに、以下の潜在変数を導入することにした。具体的には、「愛着感」、「役立ちたい」からなる潜在変数を「帰属・貢献意識」変数と命名するこ

とにする。さらに、潜在変数として、「相互関心」変数（「関心を向ける」、「関心を向けられる」）、「信頼関係」変数（「信頼感」、「他人の力」、「助け合い」）、「差別意識」変数（「差別認識」、「差別同調」）を想定することとした¹¹⁾。

ここでの検討課題は、以下の通りである。

- ①「満足感」は、潜在的な「帰属・貢献意識」変数により規定される。
 - ②「帰属・貢献意識」変数は、潜在的な「相互関心」、「信頼関係」、「差別意識」といった共生関係の変数により規定される。
 - ③ただし、「差別意識」は、他の二つの潜在変数と負の関連にある。
 - ④三つの共生に関する潜在変数は、規定関係にあるのではなく、相互に関係している（相関関係）。
 - ⑤ただし、包括的な「差別意識」は、他のふたつの潜在変数と性質を異にするため、相関は弱く、また、包括的な「帰属・貢献意識」との関連も弱い。
 - ⑥共生意識が「生活の質」意識を規定するという、意識が意識を規定するという点が本稿の前提をなしている。この意味から、共生意識と「生活の質」は、意識の面からレベルが異なる。ここで、実際の分析結果を検討してみよう（図1）。標準化係数（一方向の矢印）、相関係数（双方向の矢印）が示されている。また、「その他」は誤差、攪乱要因である（モデルの適合度は良好）。
- 潜在的な「差別意識」変数は、「差別認識」、「差別同調」と関連があるが、とりわけ、前者、すなわち、「差別認識」との関連が強い（標準化係数は、0.90）。潜在的な「信頼関係」変数は、三つの観察変数から成り立っているが、その係数の値は、「助け合い」、「他人の力」、「信頼感」の順になっている。「信頼感」への係数値が低い、それは、より一般的な性質の変数のためであろう。「相互関心」変数は、ふたつの観察変数から成り立っているが、ともに標準化係数の値は極めて大

図1 共生をめぐる意識連関



大きく、関連が強いことが分かる。潜在的な「差別意識」は「信頼関係」変数と相互に関係づけられているが、その値は、符号がマイナスで絶対値はあまり大きくない (-0.18)。それは、包括的な「信頼関係」変数と「相互関心」変数の関連が強いのに対比される。ここでは、より強い「差別意識」を想定しているが、「差異意識」に関する変数を構成したら、関連は強まるかも知れない。

それゆえ、潜在的な「差別意識」と、「帰属・帰属意識」の間の規定関係は極めて弱くなっている。それに対して、「帰属・貢献意識」への「信頼関係」の関連は強く、「相互関心」の場合よりもその標準化係数の値が大きくなっている。なお、

潜在的な「帰属・貢献意識」は、「愛着感」、「役立ちたい」から成り立っているが、その係数値は、0.5、0.4台である。そして、生活の「満足感」は、包括的な「帰属・貢献意識」により規定されているが、その値は、0.4弱となっている。

このように、「差別意識」の「帰属・貢献意識」への規定力は、ほとんどなく、また、「差別意識」と「相互関心」の関係は無相関という結果になっているが、その他の点は、妥当な結果といえよう。

IV 「生活の質」、共生の規定要因

ところで、本研究における大きな問題意識は、

共生をめぐる地域差にある。ここで、地域を、町村、小都市（人口10万未満）、中都市（人口10万以上30万未満）、人口30万以上都市（政令指定都市を除く）、政令指定都市（東京都区部を含む）、に分類した¹²⁾。そして、「満足感」、「愛着感」、「役立ちたい」、「関心を向ける」、「関心を向けられる」、「信頼感」、「他人の力」、「助け合い」、「差別認識」、「差別同調」と地域規模のクロス表分析を行った。その結果、1%ないしは5%水準で統計的に有意な項目は、「関心を向ける」、「関心を向けられる」、「助け合い」である。これらは、人間関係の密度、質に関するものであり、都市化により、人間関係が弱まることを示している。また、「差別意識」も統計的に有意であるが、それは、農村共同体のなところで、差別意識が残っていることを示している。

それに対して、「満足感」は、より一般的な生活に関する意識であるため、地域規模との関係は統計的に有意にならなかったといえる。また、「愛着感」や「役立ちたい」も、より一般的な「帰属・貢献」に関する意識であるため、地域規模とは直接に関係していない。「愛着感」は、実際の地域規模より、居住年数と関係すると想定できる。また、「信頼感」、「他人の力」は、より狭い地域において機能すると考えられる。

ここでは、こうした意識を説明する客観的要因として、その他に、以下のものを想定することにした。性別（男性、女性）、年齢（65歳以上、55歳以上65歳未満、45歳以上55歳未満、35歳以上45歳未満、20歳以上35歳未満）、職業（管理・専門技術職、事務職、労務職、自営業主（農林漁業、商工サービス業、自由業）、家族従業者（農林漁業、商工サービス業、自由業）、主婦、学生、その他の無職）、学歴（大学・大学院（旧制高校、旧制高専学校等を含む）、短期大学・専修学校等（高専、各種学校等を含む）、高等学校（旧制中学校、女学校、実業学校、師範学校を含む）、小・中学校（尋常小学校、高等小学校等を含む）、未婚・既婚（既婚（配偶者有）、既婚（配

偶者離死別）、未婚）、居住年数（生まれてからずっと、30年以上、10年以上30年未満、3年以上10年未満、3年未満¹³⁾

これらの変数の意味については、以下の通りである。

(1) 性別により、意識がどのように異なるか、という点は、基本的な問題設定である。(2) 共生、および、「生活の質」の意識が、年齢によりどのように異なるかも、また、基本的な問題意識である。(3) 階層的要因によりどのような意識の差異が生じるか、という点は、ひとつの論点になる。階層には、職業的階層、経済的階層という区分がある。経済階層の要因として、世帯収入が考えられるが、それには、世帯人数によりその意味が異なるという問題があるし、また、欠損値も多い。それゆえ、ここでは、職業を階層の要因として設定する。また、学歴は、階層を規定する要因として、不可欠である。(4) こうした分析では、世帯構成が有用であると思われるが、本調査では、未婚・既婚、子どもの人数が設定されているのみである。それゆえ、ここでは、未婚・既婚を採用することにしたい。(5) 居住年数は、本調査において、地域を重視している点から、有用性を発揮するかも知れない。

ここでは、紙面の都合から、最終的な「生活の質」に関する「満足感」、「帰属意識」に係る「愛着感」、そして、関係性の指標として「関心を向ける」に限定して¹⁴⁾、客観的要因とのクロス表分析を行った。

- ① 「満足感」については、性別、年齢、職業、未婚・既婚で統計的に有意な関連がみられる（5%ないしは、1%水準）。
- ② 「愛着感」は、年齢、職業、学歴、未婚・既婚、居住年数と有意な関連がみられる。
- ③ 「関心を向ける」と有意な関連のある項目は、年齢、職業、学歴、未婚・既婚、居住年数である（その他、地域規模）。

以上の結果を踏まえ、多項ロジスティック回帰分析を行うことにする。こうした分析では、重回

帰分析が考えられるが、その場合、被説明変数が数量である必要がある。しかし、ここでは、カテゴリカル変数として扱うこととしたい。また、判別分析では、多変量正規分析を仮定する。さらに、数量化理論、第Ⅱ類では、検定ができないという制約がある。従って、多項ロジスティック回帰分析の適用が望ましい。以下、項目の検定、および、カテゴリのB係数、有意水準、そして、オッズ比（その信頼区間）について、検討しながら、その結果を示すことにしたい。表中0は、パラメーターが冗長なのでゼロとおいたものである（以下、ネガティブなカテゴリとの関連で分析）。

被説明変数が「満足感」の場合については、巻

末の付表1を参照されたい。説明変数としては、クロス表分析の結果と同様に、性別、年齢、職業、未婚・既婚が統計に有意である（1%ないしは、5%水準）。「非常に満足している、どちらかといえば満足している」に関しては、男性のB係数のマイナスの値が大きい（統計的に有意）。また、年齢では、45歳以上55歳未満のマイナスの値が大きく（統計的に有意）、したがって、オッズ比の値が低くなっている。職業では、家族従事者のマイナスの値が大きい。これらは、満足への影響力が弱いカテゴリである。プラスの値が大きいのは、既婚（配偶者有）である。また、「満足感」で「どちらともいえない」については、統計的に

表2 多項ロジスティック回帰分析（関心を向ける）

関心を向ける		B		オッズ比		信頼区間
				オッズ比	オッズ比95% 下限	上限
1. とても関心を向けている、まあまあ関心を向けている	切片	-1.791	**			
	(年齢)					
	1. 65歳以上	.922	**	2.515	1.744	3.627
	2. 55歳以上 65歳未満	.642	**	1.901	1.356	2.665
	3. 45歳以上 55歳未満	.347	*	1.414	1.020	1.962
	4. 35歳以上 45歳未満	.519	**	1.675	1.218	2.304
	5. 20歳以上 35歳未満	0		.	.	.
	(学歴)					
	1. 大学・大学院	.719	**	2.053	1.471	2.866
	2. 短期大学・専修学校等	.796	**	2.216	1.581	3.106
	3. 高等学校	.435	**	1.545	1.189	2.008
	4. 小・中学校	0		.	.	.
	(未婚・既婚)					
	1. 既婚（配偶者有）	.978	**	2.658	1.955	3.616
	2. 既婚（配偶者離死別）	.527	*	1.693	1.114	2.573
	3. 未婚	0		.	.	.
	(居住年数)					
	1. 生まれてからずっと	1.123	**	3.073	2.072	4.557
	2. 30年以上	1.039	**	2.826	1.950	4.096
	3. 10年以上 30年未満	.491	**	1.635	1.178	2.268
	4. 3年以上 10年未満	.317		1.373	.982	1.921
5. 3年未満	0		.	.	.	

	(地域)					
	1. 町村	.338	*	1.403	1.068	1.842
	2. 人口 10 万未満	.328	*	1.388	1.050	1.836
	3. 人口 10 万以上 30 万未満	-.041		.960	.742	1.242
	4. 人口 30 万以上	.067		1.069	.811	1.410
	5. 政令指定都市	0		.	.	.
2. どちらともいえない	切片	-1.154	**			
	(年齢)					
	1. 65 歳以上	.211		1.234	.815	1.869
	2. 55 歳以上 65 歳未満	.100		1.105	.757	1.613
	3. 45 歳以上 55 歳未満	.075		1.078	.751	1.546
	4. 35 歳以上 45 歳未満	.339		1.404	.993	1.984
	5. 20 歳以上 35 歳未満	0		.	.	.
	(学歴)					
	1. 大学・大学院	.327		1.387	.930	2.067
	2. 短期大学・専修学校等	.365		1.441	.962	2.158
	3. 高等学校	.489	**	1.631	1.185	2.245
	4. 小・中学校	0		.	.	.
	(未婚・既婚)					
	1. 既婚 (配偶者有)	.428	*	1.535	1.106	2.129
	2. 既婚 (配偶者離死別)	-.091		.913	.561	1.483
	3. 未婚	0		.	.	.
	(居住年数)					
	1. 生まれてからずっと	.533	*	1.704	1.091	2.663
	2. 30 年以上	.455	*	1.577	1.031	2.412
	3. 10 年以上 30 年未満	.444	*	1.560	1.089	2.234
	4. 3 年以上 10 年未満	.233		1.262	.873	1.825
5. 3 年未満	0		.	.	.	
(地域)						
1. 町村	-.125		.882	.643	1.210	
2. 人口 10 万未満	-.080		.923	.669	1.273	
3. 人口 10 万以上 30 万未満	-.176		.839	.628	1.121	
4. 人口 30 万以上	.001		1.001	.735	1.362	
5. 政令指定都市	0		.	.	.	

(注) **は、1% 水準有意、*は、5% 水準有意。

有意なのは、性別の男性のみである。

被説明変数が、「愛着感」の場合（付表2を参照）、クロス表分析と比較すると、年齢、職業が統計的に有意になっていない。愛着を「とても感じる、まあまあ感じる」についてみると、学歴では、短大卒でB係数の値が統計的に有意になっている。学歴では、相対的に高学歴で愛着へ反応しているのは、興味深い。また、既婚・未婚では既婚（配偶者有）、居住年数では、「生まれてからずっと」、およびその年数が長いほど、B係数の値が大きく（統計的に有意）、オッズ比の値も大きくなっている。「愛着感」については、居住年数が有効な変数なのに対して、地域規模は有効でないという結果になっている。また、既婚（配偶者有）のプラスの値が大きく、彼らの地域に根付いた生活がうかがえる。一方、「愛着感」で「どちらともいえない」については、統計的に有意なカテゴリーは存在しない。

被説明変数が「関心を向ける」の場合については、表2を参照されたい。クロス表分析の結果と比較すると、職業が統計的に有意ではなくなっている。「とても関心を向けている、まあまあ関心を向けている」については、町村、小都市でB係数のプラスの値が大きく、統計的に有意になっている。従って、オッズ比の値も大きく、その影響力の強さが分かる。年齢では、年齢の高い層で、また、学歴では、高学歴ほど、未婚・既婚では、既婚（配偶者有、配偶者離死別）、そして、居住年数では、「生まれてからずっと」、および年数が長いほど、プラスの値が高くなっている。従って、オッズ比の値も高く、その影響力の強さが分かる。地域規模では農村部や小都市、また、ずっと住み続けていることが「関心を向ける」に効くのは、ある意味で当然であり、大都市で無関心ということと対比される。ただ、高学歴で「関心を向ける」への影響力が強いのは特記されよう。ここに、都市化社会における新しい関係性の可能性が示されている。また、既婚者が地域に根ざした生活をしていることがうかがえる。「関心を向ける」で

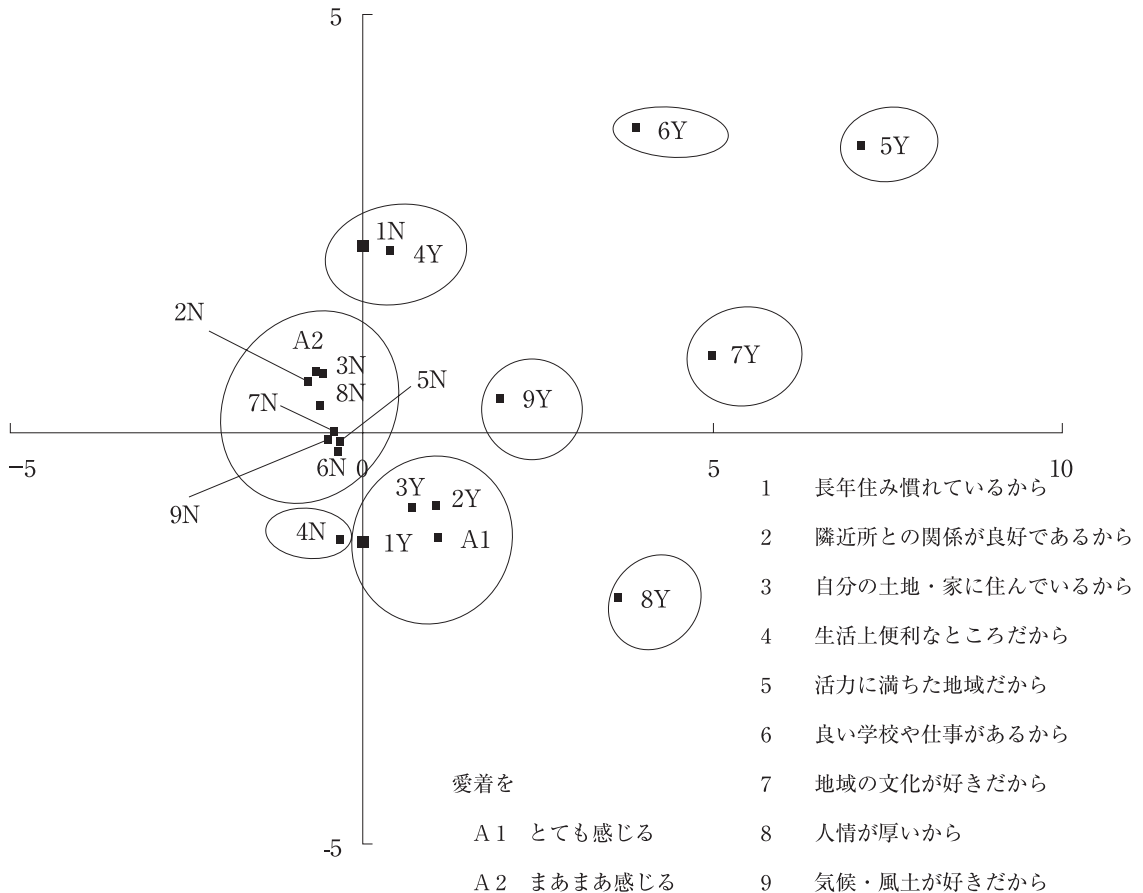
「どちらともいえない」についても、係数値が統計的に有意で、そして、オッズ比の高いものが幾つかあり、その影響力の強さが分かる。

V 愛着感をめぐる関連性

今まで、「生活の質」、共生をめぐる意識の規定要因を明らかにしてきた。例えば、「満足感」については、さらに、福祉サービス、公共施設などの領域ごとに詳細に検討する必要がある。また、どの程度、そしてどのように「関心を向ける」かという、その量、質の側面も重要になろう。ここでは、既に述べた通り、「愛着を感じる理由」について、その関連性をパターン分類の手法といわれる林知己夫の数量化理論、第Ⅲ類で分析することにしたい。その項目は9項目である。愛着を「とても感じる」、「まあまあ感じる」へ反応したサンプルに限定し、「愛着を感じる理由」との関係性を明らかにすることにしたい¹⁵⁾。

分析の結果、第5軸まで抽出すると、説明力が60%を超しているが(63.1%)、ここでは、第I軸と第II軸による二次元布置図で、大まかな傾向を把握することができる(図2)。それによると、第4象限に、愛着を「とても感じる」が位置し、それと「長年住み慣れているから」、「隣近所との関係が良好であるから」、「自分の土地・家に住んでいるから」という理由が近い関係になっている。また、第3象限であるが、「生活上便利などところだから」という理由に回答しないカテゴリーが位置づけられているのは示唆的である。愛着と「生活の便利さ」は、あまり関係がないことが分かる。実際、第II軸のプラスの方に、「長年住み慣れているから」にネガティブな反応と、「生活上便利などところだから」という項目への選択が近い関係にある。そして、第2象限に愛着を「まあまあ感じる」というそれほどポジティブではないカテゴリーが位置づけられ、それに、愛着を感じる理由に反応しないカテゴリーが繋がっている(原点の近く)。これらのクラスターから離れながら、第

図2 「愛着を感じる理由」の二次元布置図



II軸のプラスの方向に、「気候・風土が好きだから」、「地域の文化が好きだから」、「良い学校や仕事があるから」、「活気に満ちた地域だから」が、第I軸上でプラスの値が大きくなりながら、それぞれ孤立している。また、II軸のマイナスの方に、「人情が厚いから」が位置している。

こうした結果から、第I軸は、概ね、「愛着を感じる理由」に反応する（反応しない）強さを表しているといえる。実際、各項目に反応している比率は、次の通りである。「長年住み慣れているから」（62.2%）、「自分の土地・家に住んでいるから」（41.9%）、「隣近所との関係が良好だから」（39.7%）、「生活上便利なところだから」（37.9

%）、「気候・風土が好きだから」（19.8%）、「人情が厚いから」（12.9%）、「地域の文化が好きだから」（7.2%）、「良い学校や仕事があるから」（7.0%）、「活気に満ちた地域だから」（3.5%）。また、第II軸は、愛着を「感じる」、「まあまあ感じる」を弁別する軸であるといえる。

VI 結語

以上の分析により、次の点が明らかになった。

第一に、「生活の質」、共生をめぐる意識項目の関連を明らかにすることにより、その見取り図を描いた。実際には、潜在変数を仮定し、その関

連図を描くと、「生活の質」が潜在的な「帰属・貢献意識」により規定され、「帰属・貢献意識」は、「相互関心」、「信頼関係」といった潜在の変数により規定されることが分かった。それに対して、「差別意識」は、相対的に関連が弱いという結果になっている。

第二に、包括的な「生活の質」を表す「満足感」、および、「愛着感」、そして「相互関心」変数の中から「関心を向ける」について、説明要因を明らかにするために、多項ロジスティック回帰分析を行った。本研究の大きな目的は、地域をめぐる共生について明らかにすることであるが、地域規模は、「関心を向ける」で効くことが分かった。それに対して、居住年数は、地域への「愛着感」でとりわけ効く、という想像可能な結果になっている。また、その他に、これらの意識を規定する要因（性別、年齢、職業、学歴、未婚・既婚）の影響力が明らかになった。

第三に、本研究では、「満足感」など、一般的、イメージ的な意識の解明を目指した。しかし、それらの意識については、下位の領域にブレイク・ダウンするとか、その理由を明らかにすることも必要であろう。ここでは、地域への「愛着を感じる理由」について、その見取り図を描くために、林の数量化理論・第Ⅲ類で、その関連性を明らかにした。

本稿は、「生活の質」、および共生をめぐる意識の関連性、因果関係を明らかにすることを目的とした。意識とは漠然としたものである。しかし、それが時として、大きな情動に導く。また、近年、当該社会の統合、連帯感の欠如が指摘されているが、それは、ひいては、当該社会の効率性を損なうかもしれない。地域における共生のための政策、活動が、公的部門、民間営利部門、民間非営利部門の協働により、推進されることが必要になる。

注

- 1) 片利共生の例としては、コバンザメとサメ、相利共生は、イソギンチャクとクマノミ、相乗共生は、

地衣植物における菌類と藻類。

- 2) 社会科学における共生の訳は、定まっていない。convivialityが使用されていることもあるし、living togetherとも考えられる。
- 3) こうした本稿の問題意識は、三重野卓『「生活の質」と共生（増補改訂版）』白桃書房、2004。
- 4) 共生という言葉の合意が難しいように、これらの概念への合意も難しい。社会的凝集性において、排除一包摂の考え方が含まれる場合もあるし、社会関係資本の信頼の観点が含まれる場合もある。包括的に検討したものとして、例えば、Chan, J., et al., *Reconsidering Social Cohesion: Developing a Definition and Analytical Framework for Empirical Framework, Social Indicators Research*, Vol.75, No.2,2006, Berman, Y., et al., *Indicators of Social Quality and Social Exclusion at National and Community Level, Social Indicators Research*, Vol.50. No.3,2000. また、社会指標との関係では、Atkinson, T., et al., *Social Indicators: The EU and Social Inclusion*, Oxford University Press, 2002.
- 5) 「生活の質」については、三重野卓『「生活の質」の意味—成熟社会、その表層と深層へ』白桃書房、1990、同「高齢社会における「生活の質」と生命倫理」金子勇編『講座・社会変動 第8巻（少子化と高齢社会）』ミネルヴァ書房、2002。
- 6) 共生社会形成促進のための政策研究会『「共に生きる新たな結び合い」の提唱』（普及版、詳細版）内閣府、2005。共生社会促進形成のための政策研究事業、企画検討会『共生社会形成促進に関する指標体系の解説』内閣府、2006。なお、これらの報告書は、内閣府のホームページで公開されている。同研究会の委員は、橋本俊昭（委員長）、今田高俊、小野達也、広井良典、宮本みち子、そして、三重野卓。同研究会では、共生社会形成のためのあるべき社会の視点として、以下の五つの横断的視点を提案している。（横断的視点1）各人が、しっかりとした自分を持ちながら、帰属意識を持ちうる社会。（横断的視点2）各人が、異質で多様な他者

を、互いに理解し、認め合い、受け入れる社会。(横断的視点3) 年齢、障害の有無、性別などの属性だけで排除や別扱いされない社会。(横断的視点4) 支え、支えられながら、すべての人が様々な形で参加・貢献できる社会。(横断的視点5) 多様なつながりと、様々な接触機会が豊富にみられる社会。指標としては、大別して共生度指標、分野別指標の二類型を設定している。そして、指標体系のフレームについては、横軸に、共生度指標、青少年分野、高齢者分野、障害者分野をおき、縦軸に横断的視点の1から5を位置づける(マトリックス形式)。

- 7) データの目的外使用を許可して下さった内閣府の共生社会政策担当の皆様、感謝の意を表したい。
- 8) 横断的視点による共生社会の定式化は、社会的凝集性、社会的排除、社会的包摂などの考え方を統合したものであり、実際の指標、データもその他、社会関係資本など、諸外国での考え方を反映している。
- 9) 社会関係資本については、例えば、Putnam, R. D., *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, 1993. (=河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版、2001)。また、わが国における包括的な研究は、内閣府国民生活局『ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』国立印刷局、2003。社会関係資本論では、例えば、地域における社会関係資本が、個人に望ましい影響を与えるかが問われ、本稿とは、立場が異なるが、ここでは信頼感を重視することにした。
- 10) 筆者が意識関連に共分散構造分析を適用したものと、三重野卓「階層化社会における平等・格差意識」武川正吾編『福祉社会の価値意識—社会政策と社会意識の計量分析』東京大学出版会、2006、がある。
- 11) これらの項目を因子分析(主成分分析、バリマックス回転)にかけた結果、説明力60%で、四つの因子が抽出された。因子負荷量、0.3以上に着目し

て、大きい項目を示すと、次の通りである。第I因子、「愛着感」、「役立ちたい」、「関心を向ける」、「関心を向けられる」、「助け合い」、第II因子、「信頼感」、「助け合い」、「他人の力」、第III因子、「満足感」、「愛着感」、「助け合い」、第IV因子、「差別認識」、「差別同調」。

第I因子は、帰属・貢献意識、相互関係因子の性格が強く、第II因子は、信頼関係因子といえる。第III因子は、「生活の質」と帰属因子であり、第IV因子は、差別意識因子である。

- 12) この人口は、2000年の国勢調査の結果による。その後、わが国では、市町村の合併が進んだ。
- 13) なお、本研究では、積極性と目標設定性に関するパーソナリティを把握している。積極性「あなたは、自分が抱える悩みや問題に対して、積極的にその解決や状況の改善に努めるほうですか。」(そうするほうである、どちらかといえば、そうするほうである、どちらともいえない、どちらかといえば、そうしないほうである、そうしないほうである)

目標設定性「あなたは、少し無理だと思われるくらいの目標を立ててがんばるほうだと思いますか。」(そう思う、まあまあそう思う、どちらともいえない、あまりそう思わない、そう思わない)

こうしたパーソナリティのカテゴリーごとの平均値を求めると、より積極的、より目標設定的である方が、「満足感」、「愛着感」、「関心を向ける」の平均値が高い。
- 14) 満足感を被説明変数としてロジスティック回帰分析を行ったものとして、前掲(三重野2002)がある。そこでは、説明変数として、性別、年齢、健康状態、住居形態、職業、階層帰属意識が定式化されている。
- 15) 同じ方法(数量化理論、第Ⅲ類)を使用して、老後不安とその不安領域の関係について分析しているものとして、三重野卓「高齢期の生活不安をめぐる意識連関と規定要因」『山梨大学教育人間科学部紀要』第8巻、2007、がある。

付表1 多項ロジスティック回帰分析(満足感)

満足感		B		オッズ比		オッズ比の95%信頼区間	
				下限	上限		
1.非常に満足している、 どちらかといえば満足 している	切片	1.457	**				
	(性別)						
	1.男性	-.685	**	.504	.387	.656	
	2.女性	0		.	.	.	
	(年齢)						
	1.65歳以上	.059		1.061	.699	1.609	
	2.55歳以上 65歳未満	-.310		.733	.500	1.075	
	3.45歳以上 55歳未満	-.431	*	.650	.445	.950	
	4.35歳以上 45歳未満	-.121		.886	.596	1.317	
	5.20歳以上 35歳未満	0		.	.	.	
	(職業)						
	1.管理・専門技術職	.216		1.241	.705	2.183	
	2.事務職	.393		1.482	.974	2.255	
	3.労務職	-.239		.787	.546	1.135	
	4.自営業主	.034		1.035	.711	1.506	
5.家族従事者	-.663	*	.515	.306	.869		
6.主婦	.026		1.026	.686	1.535		
7.学生	.557		1.746	.699	4.357		
8.その他の無職	0		.	.	.		
(未婚・既婚)							
1.既婚(配偶者有)	.735	**	2.087	1.460	2.982		
2.既婚(配偶者離死別)	.084		1.087	.679	1.741		
3.未婚	0		.	.	.		
2.どちらともいえない	切片	.513					
	(性別)						
	1.男性	-.322	*	.725	.535	.982	
	2.女性	0		.	.	.	
	(年齢)						
	1.65歳以上	-.071		.931	.568	1.526	
	2.55歳以上 65歳未満	.041		1.042	.667	1.627	
3.45歳以上 55歳未満	-.123		.884	.568	1.377		
4.35歳以上 45歳未満	.232		1.262	.801	1.987		
5.20歳以上 35歳未満	0		.	.	.		

	(職業)				
	1. 管理・専門技術職	-.179	.836	.426	1.640
	2. 事務職	.087	1.090	.670	1.774
	3. 労務職	-.123	.884	.580	1.349
	4. 自営業主	-.253	.776	.496	1.215
	5. 家族従事者	-.546	.579	.311	1.078
	6. 主婦	-.253	.777	.483	1.249
	7. 学生	-.291	.747	.237	2.357
	8. その他の無職	0	.	.	.
	(未婚・既婚)				
	1. 既婚 (配偶者有)	.221	1.248	.833	1.869
	2. 既婚 (配偶者離死別)	-.177	.838	.485	1.449
	3. 未婚	0	.	.	.

付表2 多項ロジスティック回帰分析 (愛着感)

愛着感		B	オッズ比		オッズ比の95%信頼区間	
			オッズ比	オッズ比の95% 下限	オッズ比の95% 上限	
1. とても感じる、まあまあ感じる	切片	.272				
	(学歴)					
	1. 大学・大学院	.457	1.580	.988	2.528	
	2. 短期大学・専修学校等	.584 *	1.793	1.109	2.899	
	3. 高等学校	.129	1.138	.781	1.658	
	4. 小・中学校	0	.	.	.	
	(未婚・既婚)					
	1. 既婚 (配偶者有)	.802 **	2.230	1.567	3.173	
	2. 既婚 (配偶者離死別)	.513	1.670	.998	2.794	
	3. 未婚	0	.	.	.	
	(居住年数)					
	1. 生まれてからずっと	1.886 **	6.594	3.738	11.630	
	2. 30年以上	1.976 **	7.211	4.445	11.698	
	3. 10年以上30年未満	1.126 **	3.083	2.088	4.553	
	4. 3年以上10年未満	.234	1.263	.849	1.880	
5. 3年未満	0	.	.	.		
2. どちらともいえない	切片	.542				
	(学歴)					
	1. 大学・大学院	.030	1.031	.588	1.806	
2. 短期大学・専修学校等	.488	1.629	.932	2.849		

	3. 高等学校	-.104	.901	.571	1.421
	4. 小・中学校	0	.	.	.
	(未婚・既婚)				
	1. 既婚 (配偶者有)	.041	1.042	.698	1.555
	2. 既婚 (配偶者離死別)	-.454	.635	.336	1.200
	3. 未婚	0	.	.	.
	(居住年数)				
	1. 生まれてからずっと	.246	1.279	.670	2.441
	2. 30年以上	.026	1.026	.583	1.807
	3. 10年以上 30年未満	-.078	.925	.597	1.434
	4. 3年以上 10年未満	-.383	.682	.435	1.069
	5. 3年未満	0	.	.	.

(注) **は、1%水準有意、*は、5%水準有意。